亡命チベット社会の変容とアイデンティティ形成

人文社会

Keywords 宗教を紐帯とする連携、アイデンティティ形成、マイノリティの人権

榎木 美樹 准教授

所 属	人間文化研究科　地域文化と共生
専門分野	地域研究（南アジア）、開発社会学
所属学会	日本南アジア学会、国際開発学会、日本社会学会、東海社会学会
HP	http://www.nagoya-cu.ac.jp/human/index.html

研究概要

難民としてインドへ流出した亡命チベット人が、本国で失われた社会を異国の地で再構築する試みについて、国民統合の観点から究明します。人間の安全保障とコミュニティ形成の概念を念頭に置きつつ、難民が亡命先において、いかに現地社会と共生を図りながら民族の将来を設計するかという視点で研究を行っています。最近は、彼らの生計戦略としての移住ネットワークの今日的展開に焦点を当てます。

強み・特徴

- 他国で発生した国内避難民あるいは難民化の影響が日本においても深刻化するボーダーレスな今日的状況下で、平和的共存社会の構築を目標に、経済基盤の安定と文化の継承を目指すコミュニティ再建の在り方を模索するモデル提示の試みです。
- 国家の安全保障に偏向した既存の国際規範を相対化し、国境に捉われないネットワークの形成と人類共生のあり方を実証的に考察する適例であり、包括的かつ実証的な国際比較研究です。

今後の展望

世界に分散する亡命チベット人１３万人の悲願は、チベットへの帰還です。インドには10万人が居住しています。ダライ・ラマ14世は1987年以来、独立は放棄して中国内での高度な自治の保障を要求していますが、まだそれは実現されてはいません。2009年以来の焼身抗議は160人を超えました（2020年3月現在）。

ダライ・ラマ14世の後継者問題が議論を呼んでいる昨今、次期指導者への交代は、チベット問題の趨勢を大きく左右し、亡命社会の存続自体も重大な岐路に立たされることになるでしょう。亡命社会で実践してきた民主化の試みが今後どのように花開くのか、亡命チベット人の視点から明らかにしていきます。

写真１：蜂起の日（3月10日）を記念するデモ行進で先頭を歩く尼僧

写真２：チベット新年3日目を祝う儀礼：右手にツァンパの粉をつまみながらコルラ（右繞）した後、それを宙に投げ1年の幸福祈願をする

研究者からのメッセージ

・「当事者性」「民際学」を主軸においています。
・難民1世代が高齢化を迎える中、「チベット」を実際には知らない世代がコミュニティの中核を担っていくことは避けられません。彼らの描く「未来チベット」を明らかにします。

問い合わせ

産学官共創イノベーションセンター
（桜山キャンパス本部棟2階／事務局学術課内）
〒467-8601　名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地
（名古屋市営地下鉄桜通線「桜山」駅③出口すぐ）
☎ 052-853-8309　　FAX 052-841-0261
✉ ncu-innovation@sec.nagoya-cu.ac.jp

最終更新日　2020/12/2